
スマイルペブル

はなだりょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマイルペブル

【Nコード】

N6323V

【作者名】

はなだりよう

【あらすじ】

笑った顔の石を見つけたら思い出して。君が望めば、君の身の回りにある何もかもが、伝説の秘宝にだってなる。だけどその伝説の全貌を知ってるのは、自分と、大切な人だけでいいんだ。

この世で一番きれいな心を持った人から見たら、この世のあらゆるものは醜く見えるのかな。

だって、この世の全てはその人より醜いんだから。

きっと、あらゆるものの醜さを、その人は「許す」んだろうけど。

それとも、あらゆるものに美しさを見出そうとするのかな。

でもきっとそれって、とても寂しい事なんだから。

だって、この世界で、その人と同じ次元で、あらゆるものに美しさを見出そうとする人は存在しないんだから。

この世でいちばんきれいな人はきっと、この世で一番孤独だ。

その高みには、誰もいない。

自分が、この世で一番綺麗な人間じゃなくてよかったとおもう。

僕の視界には友達がいる。

対話できる距離に友達がいる。

孤独は嫌だ。怖い。なりたくない。

孤独になりたくないのに、気付くと、半ば無意識のうちにもっとも
っと高いところに行こうとしてる自分に気付く。

世界の全てを理解した人は、きっと言葉を発さなくなると思う。

自身の発する言葉を、あらゆる人類は理解できないって、きっとそ
の人は悟るから。

可哀想な人だ。

僕は可哀想な人間になりたいのかなあ。

道理や原理や感性を追求したい意欲が消えない。

孤独になりたくないのに「誰よりも」研ぎ澄まされたいと、心のどこかで思ってる。

今はまだ僕程度の高さにはたくさん人がいる。

上にもまだまだ人がいるから安心できる。

だけど時々怖くなる。

どこまでか登った時、その研ぎ澄まされ過ぎた感覚の世界に、他者はいるんだろうかって。

人と会って、その時はすごく満たされた気持ちになって、でも別れて家に帰ってしばらくすると、いつも不安になるのはきつとこついう理由だ。

どこまでも霧が続いてる。

「どこまでも続いている」って皆知ってるから、その霧に足を踏み入れない。

僕は馬鹿みたいにその霧の中を彷徨ってる。

時々、霧の「向こう側」が見えちゃいそうになる。

けれど、霧の「向こう側」に抜けてしまったら帰れない事を漠然と理解していて、だから、立ち止まって引き返す。

本心を言えば、霧の向こうまで、一緒に行ってくれる「つがい」を探してるんだと思う。

ラピユタでいうところのシートだ。

大きな水溜り、送電線、東がピンクで西が藍色の空、猫がこっちを見ていて、軽トラックが前を横切る。

水しぶきに映り込む「あらゆるもの」が見えてしまいそうになって、目を閉じる。

完全に中二病だ。

4歳の頃、両親が保育園まで妹を迎えに行って、だから一人で留守

番してた。

窓から差し込んだ西日が押入れのふすまに陰を作って、それが動物の形に見えた。

何の動物かは分からないけど、とにかく動物みたいって思った。

その影に意思があるような気がして、急に怖くなった。

部屋には自分とその影だけ、もしその影に襲われたら、守ってくれる両親はいない。

だけど、こっちから友好的に歩み寄れば、向こうも友好的な態度を返してくれるんじゃないかって気がした。

出来たら、友達になりたいなって。

そんな風に思っ、ふすまに出来た影を、消えるまでずっと、爪を噛みながら見てた。

今でも、何かを凝視しながら爪を噛む癖がある。

デスノートのLの真似？って聞かれるけど、物心つく前からずっとしてる。

治らないだけだ。

1歳半の頃の事も覚えてる。

妹が生まれるってんで、オカンが入院して、オトンも昼間仕事があったから、僕はどこぞの家に預けられてて、その時の事とか、オトンが運転する赤の軽ワゴンで家に帰って、台所のクリーム色の米びつを見た時、オカンまだ帰ってこないんだなって思って、急に寂しくなった事とか。

1歳半の自分が感じた所感を鮮明に覚えてる。

「記憶がある」「じゃなくて、1歳の時感じたこと、考えたことを」「あの時と同じ感覚で」思い出せる。

5歳の頃、チエルノブイリ事故があって、黒い雨が降るって言われている中、近所の友達の家まで行った日の事も覚えてる。

結構強めに降ってる雨が黒くは見えなかったから、水溜りを見て、

ほんとに黒いのがなって確かめようとしたけど、オカんに「濡れたら駄目よ！早く！なにしてるの！！」って怒られた。

黄色いレインコートを打つ雨の音と、レインコートの蒸れる匂い。

「今思い出して」「じゃなくて、あの時漠然と感じた寂しさみたいなもの。」

僕は1歳の頃から、「別に孤独とかじゃなくて」、何の理由も無く、ある瞬間に「寂しい」って感じる人間だった。

その寂しさをずっと覚えてる。

昨日の事みたいに思い出せる。

皆そんなもんだといつも思ってた。

わりとみんなそんなこと考えない、気に留めてないって事にある時唐突に気付いた。

自分の見てる世界と、人が見てる世界、実は全然違うんだって思ってた、怖くなった。

小学2年くらい頃から、年に数回ずつ、別の誰かに、同じ言葉を
言われる。

「りょうくんって、なんか、変。
何考えてるか分かんない。
自分と同じ人間って思えない。
りょうくんみたいな人はじめて見た。
なんか怖い」

って。

今でもやっぱり年に数回ずつ。

敵意剥き出しで言われる事もあるし、好奇に満ちた目で言われる事
もあるし、ただ奇妙なものを見る目で言われる事もある。

別にそう言われても、悲しいとか、寂しいとかは感じなくて、ただ
遠くなる感じだけがあった。

映画とかで、カメラが対象から徐々に遠のいていくような、ああい
う感じ。

思考が停止、またはそれまでの会話と全く関係ない方向に一瞬で広がって、気付くと僕にその言葉を投げかけた相手は目の前からいなくなっていて、大抵は家の近くの花壇から、うちの階段に向かう、その辺りに立っていた。

そして、その言葉を僕に投げかけた相手と次に会った時、その相手がドラクエとかに出てくる「町人A」みたいな、プログラミンングされたスク립トで動く自動人形みたいに見えるようになった。

高校に入った頃から、どうすれば「人間臭さ」を出せるか、「演じる事」を覚えるようになった。

しゃべり方、声のトーン、テレビドラマを見て、確か当時良くドラマに出てた堂本剛あたりの真似をしたんだっと思ったと思う。

ああいう気さくな感じにしたら、人に「怖い」って言われる事もないだろうって。

二十歳くらいになって「人の猿真似ばかりしてる自分」が嫌になって、それまでの話し方とか、動きの癖とかを意識的に排するようになって、余計ぎくしゃくした動きとしゃべり方をする人間になった。

だけでもう「人からどう思われる」っていう事に興味が無くなって、

ただ「自分がどう在りたいか」しか意識しなくなって、今に至る。

今でも若干「普通」とは違うなって自分で思うけど、直そうとは思わなくなつた。

メンヘラに憧れてメンヘラになつちやつて、お薬手放せなくなつた系の子を僕は200人くらい見てきた。

僕はそういう子らに昔からやたら仲間意識を持たれて、好かれる傾向にあつて、相手が可愛い子なら付き合つたりもした。

でも特に気持ちが高ぶつたり揺さぶられたりする事はなかった。

多分、「歪んだ生き物に憧れて、自らもそうなりたいと願つてる少女ら」や、本当に病理学的に病んだ子と、僕の「ゆがみ」は少し原因や「向き」が違うんだと思う。

僕に見えているものが、彼女らには見えてないと感じる。

彼女らは必ず「わたしにもわかるよ!」って言うけど。

大抵これを言われると、上にも書いた、何もかもが遠くなって、相

手がただの自動人形に見える現象が起こる。

だから、最近はどうなに可愛くても、そういう子とは付き合わなくなった。

天体観測をする事に、ロマンを感じない。

小洒落た事ぬかしやがってと思う。

でも、目立つ星一個ずつに、天文学的ナンチャラは完全にシカトしたような勝手な名前をつけてって、途中で飽きて、どうでもよくなって、ビール飲んで、とりま一番お気に入りだったヤツだけでもと、思ってまた見上げるんだけど、もうどれか分かんなくなってる、でも諦めつかなくてしばらく探して、なんかちよっと寂しくなる感じは好き。

そついう感じを誰かと共有したい願望がある。

「あれじゃない?」

「ちげーよ馬鹿、あっちだって」

「うそー、あんなト」じゃなかったよ」

出来れば一番愛する人がいい。

多分、こんな事言ってる限り一生独りだろつなと思う。

でも多分「この世で一番きれいなひと」ほどの絶対の孤独じゃないから、まだ耐えられるんだと思う。

友達がいるもん。

友達が笑ったときの顔の口角の感じとか、目じりのしわとかをそっくり石に刻んで、ちよつと雑な感じで押入れに放り込んでおきたい。

一回笑うごとに一個石に刻むの。

いっぱいになって、押入れあける度に1000個の顔の石に見つめられるのはさすがにちよつと怖いから、ある程度溜まったら多摩川に放り込む。

夜だけ光るように夜光塗料塗って。

多摩川の下流あたりの暗い川底で、僕の知人ではあるけど、当人同士は全く見知らぬ他人の笑顔と笑顔が出会うんだ。

そして夜だけ光る。

多摩川名物、笑う小石。

いいじゃんいいじゃん。

こういう妄想で人生の8割が埋め尽くされてる。

自分のこういう感性お金にならないかなあ、なんて時々思うけど、ならないだろうなあと半分諦めてる。

なんかこう、芸術家志望の人たちみたいなき欲的なアレと違うんだ。

芸術家の人って、こういうの「捻り出そう」とするじゃん。

頑張って形を整えようとするじゃん。

僕のする表現には、そういう引き締まった美しさが無い。

僕がしてるのは、ただ「なんか今溢てきたから出した」だけ。

笑った小石の事ばかり考えて、今日も求職活動が一向に進まない。

ねえ誰か養ってよ。

多分いい働きするよ、夜は。

お金欲しいな。

お金いっぱい貯めて、そのお金で女装関係の友達とG I Dの友達全員に無駄毛永久脱毛券あげて、恩を着せて、「俺お前にあの時アレあげたでしょ。言う事聞いて」って言って、問答無用で女装させて、ひよこの着ぐるみも着させて、勇者ごっこするの。

おれ勇者。

女装したPTメンバー達（ハーレムとも言う）の先頭に立って敵を片っ端からハタキ倒しに行くの。

敵はいろいろ。

今ここで「こいつ敵！」って定めなくても、世の中には戦わなきゃいけないもの、沢山あるから。

昔から、多分1歳半の頃から、おれこんなやつだった。

勇者であるおれの後ろついてきてくれるの妹だけだったけど。

その妹も思春期入っておれの後ろついて来なくなっちゃったけど。

多分俺っていう人間、死ぬまで変わらないと思う。

だからお前らついてきて。

偉そうでごめんだけど、おれ勇者だからね。

ごめん。

全部「お金がもしいっぱいあったら」の妄想だった。

現実の僕は四畳半一間で、ボクサーパンツ一丁で椅子の上に胡坐かいて、パソコンの前で貧乏ゆすりしながら意味不明な妄想を垂れ流してるただのキモオタだ。

ごめんね。

ありがとう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6323v/>

スマイルペブル

2011年10月3日16時19分発行